79　誌上発表　森立之『素問校注』の巻一について

澤谷　直子
日本鍼灸研究会

本調査は森立之の『素問校注』の研究成果の中でも音韻学に焦点をあて，押韻指摘の具体的な在り方を解明するものである．底本には『黄帝内経古注選集』（オリエント出版社，1985年）所収本を使用し，喜多村直寛著『黄帝内経素問講義』，江有誥著『先秦韻読』，王念孫著『素問合韻譜』，銭超塵著『内経語言研究』を参照した．なお今回の調査報告は巻一（上古天真論篇第一，四気調神大論篇第二，生気通天論篇第三，金匱真言論篇第四）までとする．

『素問』における押韻指摘の例は，清朝考証学の『素問合韻譜』や『先秦韻読』，江戸考証医家の『黄帝内経素問講義』や『素問校注』に見られる．これらを比較すると『素問校注』の押韻指摘箇所が圧倒的に多い．篇第一から篇第四までの押韻指摘箇所を挙げていくと，『素問合韻譜』が11箇所・21箇所・6箇所・0箇所，『先秦韻読』が13箇所・27箇所・12箇所・0箇所，『黄帝内経素問講義』が12箇所・14箇所・2箇所・0箇所，『素問校注』が12箇所・38箇所・62箇所・0箇所である．いずれも篇第四は0，篇第一は11～12と共通するが，篇第二，篇第三では差違がある．以下，『素問校注』でもその説が引用される喜多村直寛との比較を中心にその詳細を述べる事とする（01-07b04とは篇一第七葉裏四行目，01補-01a02とは篇一補注第一葉表二行目を指す）．

①01補-01a02「隔句押韻」の霊（耕韻），明（陽韻）は，喜多村直寛の『素問箚記』を引く．『黄帝内経素問講義』（以下『講義』と略）にも同じ指摘あり．②01-08a08の漿・常・房（陽韻）は，『講義』では漿・常・房（陽韻），清（耕韻）と，真・神（真韻）だが，清・真・神は採らず．③01-09b09の時・之・来（之韻）は，『講義』では之・時・之・来（之韻）だが，始めの之は採らず．④01-10b06の食・服（職韻），俗・朴（屋韻）は，『講義』無．⑤02-01a04の生・栄・庭・形・生（耕韻）は，『講義』無．⑥02-01a06の殺・奪・罰（月韻）は，『講義』無．⑦02-03b08の平・寧・刑・平・清（耕韻）明（陽韻）は，『講義』では平・刑・平・清（耕韻），明（陽韻），興（蒸韻）となる．『内経語言研究』では平・明・寧・刑・平・清（耕韻）を指摘している（「明」を陽韻でなく耕韻とする）．⑧02-04b09の蔵・陽・光（陽韻）は，『講義』も同じ．⑨02-05a06の匿・意・得・極（職韻）は，「『大素』作「使気不極」」を採る．『講義』でも『大素』を引用するが押韻の指摘はなし．⑩02-06a08の施（歌韻）・死（脂韻）は，『講義』無．⑪02-06a10の至・失（質韻）・起（之韻）・滅（月韻）は，之韻が押韻するか未詳．『講義』無．『内経語言研究』280頁，失（質韻）と滅（月韻）の指摘あり．⑫02-07a04の疾・失（質韻）・竭（月韻）は「『大素』「病」作「疾」」を採る．『講義』無．『内経語言研究』280頁，失（質韻）と竭（月韻）の指摘あり．⑬02-09a03の根・門（文韻）は，『講義』も同じ．『内経語言研究』269頁，本（文韻），根（文韻），門（文韻）の指摘あり．⑭02-09a06の本（文韻）・真（真韻）は，「『大素』無「矣」字」をうけ「真」を採る．『講義』無．⑮02-09a07の逆・格（鐸韻）は，『講義』無．⑯02-10a05の井（耕韻）・兵（陽韻）は，「『大素』「錐」作「兵」」を採る，『講義』無．以上が篇第一と篇第二である．

篇第三は全篇にわたり押韻の指摘があり，『大素』との校勘による箇所も多く見られた．幾つかを例に挙げる．

⑰03-03a10の行・章・明（陽韻）は，「『大素』「所」作「行」」を採る．⑱03-04a08の汗・喘・言・炭・散（元韻）は，『講義』では炭・散（元韻）となる．『講義』の篇第三の押韻の指摘は当該箇所のみ．⑲03-09a06の枯・疽・虚（魚韻）は，「『大素』「痺」作「疽」」を採る．⑳03-11a09の従・腫（東韻）は，「『大素』「従」作「順」」を採らず．㉑03-12b07の拒・序（魚韻），毒（覚韻）・客（鐸韻）は，「『大素』「拒」作「距」，「害」作「客」」の「距」は採らず「客」は採る．